

## 6 頼山陽筆の燈籠（大阪天満宮）

北区天神橋2-1-8

- ▶ 「常夜灯 嘉永6年(1852)6月 願主 殿村氏」と刻まれた燈籠がありますが、それを書いたのが頼山陽です。



## 7 西山宗因向栄庵跡（大阪天満宮）

北区天神橋2-1-8

- ▶ 天満宮の表門前に建っています。  
西山宗因は、慶長10年(1605)に生まれ、肥後の城代加藤正方に仕えていた武士です。連歌を学び、正保4年(1647)、天満宮連歌所宗匠として来坂します。初め境内の長屋に住みましたが、明暦2年(1656)9月、庵を築いて「告天満宮文」を草し、天満宮会所支配人も兼ねて連歌の指導普及、段林派の俳諧活動を始めました。庵は「有芳庵」と名づけのちに「向栄庵」と改めています。宗因の弟子に井原西鶴がいます。松尾芭蕉も宗因派でした。



## 8 西山宗因句碑（大阪天満宮）

北区天神橋2-1-8

- ▶ えびす門の中に西山宗因の句碑があります。

宵のとし雨ふりける元日に 浪華津にさく夜の雨や花の春  
俳諧談林初祖 梅翁西山宗因

## 9 神武天皇聖蹟難波之碕碑(大阪天満宮)

北区天神橋2-1-8

- ▶ 表門から入った左手に大きな碑が建っています。  
昔、河内平野には「河内潟」という湖があり、上町台地の先端がこのあたりだといわれ、大阪湾(瀬戸内海)に面していました。

神武天皇が東征した際、日本書紀に次のような記載があります。

まさに難波碕(なにわのみさき)に到る時、弁(はや)き潮(なみ)にありてははなはだ急(はや)き  
に会ひぬ。よりにて名づけて浪速(なみはや)国とす。浪速(なには)といふは訛(なま)れるなり。

この一節を参考に、昭和15年(1940)11月、当時の文部省がここに碑を建てました。



## 10 大坂城主松平忠明屋敷跡(大阪天満宮)

北区天神橋2-1-8

- ▶ 松平忠明は、天正11年(1583)、奥平美作守信昌の四男として生まれました。母は徳川家康の長女の亀姫です。  
天正16年(1588)、6歳のときに初めて徳川家康と対面し、養子となり松平姓を名乗ることを許されました。  
慶長4年(1599)、徳川秀忠の前で元服し、秀忠の忠の字をもらい忠明と名乗ります。翌5年には下総守となり、同7年に三河遠江1万7千石の大名となります。  
同15年に伊勢亀山5万石、同19年及び元和元年におこった大坂冬の陣、夏の陣で戦功をあげ、同年閏6月に大坂10万石の大名となりました。  
大坂の陣以後、4年かけて忠明は大坂の復興に力を注ぎました。  
その後、大和郡山などを経て姫路18万石の領主になり、62歳で世を去ります。  
忠明以後の松平家は、明治維新まで13代続きました。  
松平忠明が大坂城主だった頃、屋敷が大坂天満宮の敷地内にありました。  
現在の境内の北東の位置で広域な屋敷だったとそうです。

## 11 松平忠明奉納の燈籠(大阪天満宮)

北区天神橋2-1-8

- ▶ 江戸期に川崎東照宮が創建され、明治期に廃止されましたが、松平忠明が奉納した燈籠が、大阪天満宮の天満宮会館の中にあります。



松平忠明奉納の燈籠



## 12 近藤南州頌徳碑（大阪天満宮）

北区天神橋2-1-8



近藤南州は、嘉永3年(1850)、松山で生まれました。近藤南州の名は元粹、号は蛭雪軒といいます。父は有名な近藤名州で、幼い頃から父の影響を受けています。松山藩の名教館で漢学を学んでいましたが、明治7年(1874)に名教館が廃校となり、翌年大阪に移ります。司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」で主人公の一人、秋山好古が大阪師範学校に入るため大阪へ向かう船中で、同じ目的の近藤南州が登場しています。小説では次のように記載されています。

近藤元粹の父は名州と言ひ、詩文をもつて有名であつた。長兄は元修と言ひ、信さん（秋山好古）がうまれた年の安政六年、幕府の最高学府である昌平黌に学び、業をおえたときに維新の瓦解がきた。版籍奉還までは藩の学問所の教諭をしていたが、藩が県になってからは私塾を開いて城下の子弟を教えている。（途中省略）近藤元粹はのち南州と号し、大阪で猶興書院という学塾をおこし、在野の漢学者として活躍した。

明治から大正にかけては詩人としても活躍し、「風騷吟社」「逍遙游吟社」を主催します。大阪の天満宮境内にある「天満宮御文庫」に近藤南州の膨大な蔵書が納められています。また、その蔵の前に「南州近藤先生頌徳碑」が建てられています。



天満宮第二文庫



南州近藤先生頌徳碑



## 後藤松陰墓所(天徳寺)

北区与力町2-1

後藤松陰は寛政9年(1797)に生まれ元治元年(1864)に亡くなります。  
名を機(はた)。字を世張。通称を俊蔵または春草。安八郡森部村に、医師 後藤玄中の二男として生まれます。

16歳で菱田毅斎の私塾の塾長を務め、毅斎の勧めにより頼山陽の門人となります。  
文政3年(1820)、大坂の永代浜で開塾し、文政8年(1825)、朱子学者である篠崎小竹の娘町子と結婚します。この頃、「詩の広瀬旭莊、文の松陰」と呼ばれ評されていました。  
塾名は「広業館」といいますが、何度か移転し、後藤松陰が60歳の頃には梶木町御霊筋西南角(現在の北浜4丁目)で開いていました。

嘉永6年(1853)1月11日並びに、4月1日、3日に長州萩から江戸へ向かっていた吉田松陰が後藤松陰を訪ねたと、吉田松陰の旅日記「癸丑遊歴日録」に記載されています。

今回は大阪市北区・都島区の史跡をご紹介します。  
次回もご期待ください。